

英文書類や英語論文で必須の基本表現

これだけは身に付けたい基礎ルール

Rules for editing effective documents
and academic articles

東京電機大学客員教授
早稲田大学名誉教授

教育学博士

篠田 義明



南雲堂

はじめに

『某大学の英語の先生が試験問題として提出してきた英文が、
「文法・構文には間違いは見られないが、表現に無駄が多く、内
容も幼稚なので大学の試験問題としては不適切だ」と英語のネ
イティブスピーカーから言われました。英語の先生方は沈黙し
ているだけで、何の反論もしていないので篠田先生のご意見
をお伺いしたい』

という文面で、責任者からその英文が私に送られてきました。調べてみる
と、その英文はインターネットから取り出されたもので、英語を母語として
いない国の人が書いたものでした。

今のICT時代は、どんな英語でも受け入れられる世の中ではありません。
東京大学の齊藤兆史先生は、朝日新聞で「学校で使える英語なんて幻想だ」
と書かれていました。これは「学校で教える英語は、卒業後の研究分野や実
務の世界で使われる英語とは程遠い」ことを意味しているのです。

今まで学校で習ってきた英語の多くはゲームをしているようなもので、そ
のままでは実用の世界では不適切です。学校英語は必須です。TOEIC® も必
須です。しかし、その域に留まっていたはゲームに興じているようなものです。
基礎は大切ですが、論文や実務の世界では基礎だけでは通用しません。適切
なレベルにまで上げなければなりません。

いろいろな大学や研究所で「英語論文の論理構成と正確な表現法」を、ま
た、多くの企業で Business・Technical English を講義し、宿題を添削中に、
英語自体がそのレベルに達していない受講生の多いのに気付きました。そこ
で、この分野に於ける英語の使用者のレベルを高めるためと、この分野に適
応する英語を詳述した本が殆どないことと、上記の試験問題の英文が現実に
即さないレベルであること、などに触発されて基礎ルールを本書に叙述しま
した。ルールを身に付けるには天才、秀才の必要はありません。習得しよう
とする意欲があればよいのです。今まで習ってきた稚拙な英語を真正、かつ
適切な英語にレベルアップするのに本書を活用して戴ければ幸いです。なお、
中級コースに『ICT時代の英語コミュニケーション：基本ルール』（南雲堂）、

上級コースに『科学技術英文の論理構成とまとめ方』（南雲堂）があり、必読に値します。

R.R. Jordan (1997) は、*English for Academic Purposes* で、イギリスの大学で学んでいて、英語が母語でない大学院生が書いた英文で一番多い誤りが Vocabulary, 次が Style だと指摘しています。同じく研究職の方々の書いた英文で一番多い誤りが Style, 次が Grammar, 次が Vocabulary だと特記しています。順序は違うが弱点は共通しています。本書ではこれらの問題の解決法も詳述し、演習問題も添えました。

本書は、東京電機大学の畠山省四朗先生、汐月哲夫先生、石川潤先生、中村明生先生、岩瀬将美先生、他の先生方のご協力がなかったら完成しませんでした。特に中村明生先生には全原稿をお読みいただき、貴重なご助言を戴きました。ここに厚く御礼申し上げます。また、本書の刊行をご推進してくださった南雲堂の岡崎まちこ氏と編集の加藤 敦氏に衷心よりお礼申し上げます。

平成 26 年 11 月 3 日

篠田 義明

目次

ルール 1	学校英語と実務英語の相違	7
ルール 2	幼稚な英語（Weak verbs）から脱皮	14
ルール 3	多くの日本人が誤解している英語	17
ルール 4	英語のスタイルに注意	19
ルール 5	大切な準専門用語と専門用語	22
ルール 6	One word・one meaning を順守	30
ルール 7	名詞と動詞・形容詞の相性	36
ルール 8	注意すべき名詞の形容詞用法	40
ルール 9	極力避けよう句動詞	48
ルール 10	極力避けよう否定文	51
ルール 11	状況で判断しよう受動態	53
ルール 12	乱用を避けよう It is ... to [that] 構文	56
ルール 13	極力避けよう There 構文	58
ルール 14	従属文を主語（部）に	60
ルール 15	話題の中心語が主語	62
ルール 16	不要語を削除	66
ルール 17	不要な関係代名詞	69
ルール 18	効果のある関係代名詞	72
ルール 19	大切な挿入句	75
ルール 20	接続詞 and に注意	77

ルール 21	文を羅列しても意味不明	79
ルール 22	極力避けよう代名詞	86
ルール 23	並列関係は同じ形で表現	89
ルール 24	however, therefore などの誤用	92
ルール 25	述べる順序に注意	96
ルール 26	略語の種類と作り方	101
ルール 27	カタカナ英語に注意	104
ルール 28	無視できない句読法	106
ルール 29	有益な辞書	131
ルール 30	参考書	131
参考	Presentation で用いる英語	132
解答	練習問題の解答	139

英語を教える段階では、分かりきったことでも英語で言うことが多い。例えば

「鳥は空を飛ぶ」

を英語では何と言うか。これを

Birds fly in the sky.

と英語で表現すると、学校の試験では sky は間違いで air が正しいから、その誤りだけが点数から引かれる。しかし、実務の世界では内容が間違っているから 0 点である。また、学校では教師は

Birds fly in the air.

と理由なく直し、通例、そのように覚えなさいと言って、理由を説明しないことが多い。実用文では「**自明の理 (truism)**」、つまり、「**分かりきったことを言う**と軽蔑されるので言わない (Don't state obvious facts.)」というルールがある。



避けよう幼稚な英語 (Avoid the primitive English)

ここでアメリカの小学校 1 年生, 2 年生, 6 年生レベルの科学を中心とした英語を紹介しよう。

The first grade

Look at an airplane in the air.

We can see the airplane.

It has a shape and color.

But we cannot see air.

We feel air.

Tell how you know air is real.

The second grade

This factory has many electric wires.

The electricity for a factory is very strong.

The electricity is not the same as in your home.

The electricity comes from a powerhouse.

Tell which objects work by electricity.

The six grade

A compass needle is a magnet, and only magnetism can make it move.

Whenever there is an electric current, it sets up a magnetic field. If the current is steady, or unchanging, the magnetic field is also unchanging. However, when you talk into a transmitter the current is not steady, and the electric vibrations in the wire send out electromagnetic waves. These waves spread around the world and out into space at the speed of light.

篠田義明：『科学技術英語の正しい訳し方』（20-31）（南雲堂）

学校での、これらの指導目的は英語の単語と構文を教えるだけである。The first grade も、The second grade も、The six grade も何を教えたいのだろうか。まず、目的が判らない。科学技術の分野や実務の世界で大人同士は、英語で

Look at an airplane in the air.

や、日本語で

「空を飛んでいる飛行機をご覧ください」

などとは言わないだろう。もしも、こんなことを言ったら、「だから何ですか」「何が言いたいのですか」のような質問をされるだろう。逆に

「空を飛んでいる飛行機をご覧ください」

を学生に英語で言わせると

Look at an airplane which is flying in the sky.

と言い、先生はこの英語に何も言わないで認めてしまうだろう。airplane は sky では飛べないのである。接頭語の air- から連想できよう。科学技術の世界や実務の分野では which is flying は冗語 (redundancy) である。

We can see the airplane.

も何が言いたいのだろうか。

The second grade の

This factory has many electric wires.

も何を教えたいのだろうか。実務の分野では、「工場」は、今は factory ではなく plant である。powerhouse も科学技術の分野では power plant である。The six grade も electric current (電流) から electrics field (磁場), electric field から electromagnetic waves (電磁波) と説明されているが、だから何だろうか。A compass needle (方位磁石の針) も科学技術の専門分野では A compass pointer (方位磁石の指針) である。

.....

これら小学校の英語のテキストは英語の単語と構文を教えることを目的としており、読み手に何を伝えたいのかは目的としていない。従って、読み手に行動は期待していないし、英語を母語とする欧米の大人に

は無価値である。科学技術の分野では **Avoid the primitive English.** と言いたい。しかし、学校ではこれが指導目的なのだ。科学技術や実務の世界では、このような世界の英語を聞くと疲れるだけで、何の利益もないだろう。



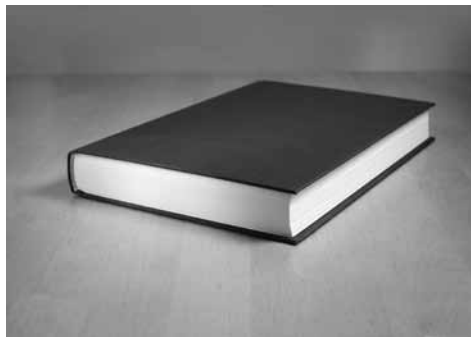
無視できない機能語 (Function words)

「機能語」とは、その語自体は内容のない語、つまり、前置詞、関係代名詞などを指す。日本語では格助詞に当たり、「～が」「～は」などという。

私が中学校で習った英語の本には、

There is a book on the table.

The book is thick.



のような英語があり、前者を「机の上に本がある」と訳し、後者を「その本は厚い」と訳したことを思い出す。この下線をした「が」と「は」は交換できない。つまり「机の上に本はある」「その本が厚い」とすることは出来ない。最初の英文の「が」は未知 (unknown) の「が」、2番目の英文の「は」は既知 (known) の「は」といえる。

.....

科学技術や実務の世界で問題を起こしているのは「このシステムが悪い」と「このシステムは悪い」の相違である。「君が悪い」と「君は悪い」の違いにも適用できる。この相違が英語で表現できなければ英語の実力があるとは言えないだろう。法律問題にまで進展する可能性があるからだ。

「このシステムが悪い」

は文法と構文を中心に指導する学校英語ならば、

This system is bad.

で許されるだろう。しかし、実務の世界では、こんな曖昧で幼稚な英語は許されない。

Now, this system does not work properly.

あるいは

Now, this system is not accepted.

などになり、

「このシステムは悪い」は

Usually, this system does not work properly.

あるいは

Usually, this system is not accepted.

などになる。

理由は簡単である。「空が青い」と「空は青い」の違いである。前者は「今、空を見ている」のであり、後者は「空は、何時も、青い」ことである。従って、これを英語にすると、前者は *Now the sky is blue.* となり、後者は *The sky is always blue.* ということになる。

.....

次の様な違いも習得しておかなければならない。

「ロボットの腕は長い」 (1)

「ロボットは腕が長い」 (2)

で、「長い」を *long* と考えて、

The arms of this robot are long. (3)

のように (1) と (2) を (3) のような一つの英文で片付けてしまう人が多い。なかには、(2) を

× **This robot is long arms.** (4)

とする人もいる。これは、「このロボットは腕が長くある」と考えて、「～ある」は be 動詞で表現できると思い込んだ結果生じた誤りである。He is a boy. の場合は He = a boy で等価が成立するが、This robot = long arms の式は成立しないので、(4) は認められない。

「このロボットは長い腕を持っている」

と考えると、

This robot has long arms. (5)

とすることにより正しくなるが、読み手はどのような印象を抱くだろうか。幼稚 (childish) である。has を is equipped with にするとよい。

(1) と (3) は、「ロボットの腕と他の部分」、あるいは、「ロボットの腕と他の動物の腕」などを比較した表現である。つまり、

**The arms are long.
However, the legs are short.**

とか、

**The arms of this robot are long.
However, the arms of this puppet are short.**

のような意味合いを出す。

(2) と (5) は

「このロボットという製品は腕が長い」

ことを言っているに過ぎない。主語に前置詞句や関係節が続くときには、その主語が正しい用いられ方をしているか否かに絶えず注意をするべきである。

まだ機能語や内容語 (Content words) など枚挙に暇が無いので後述する。